

おいしいものを食べるときどう感じるだろうか、
 幸せを感じるだろうか。では、食べ物がいち
 どうや、て感じるだろうか。もちろ人、他のもの
 の中で、最も重要なものは味である。人々はして
 も長い間異なつた種類の味について研究してきた。
 2000年以上前、味の仕組みを見つけ出そうとした
 ものがすでにいた。それ以来、人々は「基本的な味
 がいくつあるのか。」「どうや、て異なる味を感じる
 のか。」考(1)。7つの基本的な味があると考へた人
 もい水ば、5つがあると考へた人もいた。20世紀の
 初めまで、多くの人々は4つの基本的な味がある
 ことに賛成だった。そのとき、日本の科学者が第
 5の基本的な味を見つけた。「新しい味とは何か。
 甘い、にがい、すっぱい、辛い、しょっぱい。5
 つの基本的な味がある。」と多分言うだろう。えー
 ある科学的な研究は辛い^{辛い}が基本的な味でない(2)示
 している。驚くだろうか。後で理由を学ぶだろう。
 では、日本の科学者が見つけた新しい味とは何
 だろうか。うま味と呼ぶ。(3)。しかし他の基本的
 な味、例えば、しょっぱいや甘いほどはっきりと
 は感じられな^い。食べものがそ人なにおいしくな
 い^い感じたが理由が挙げられな^いとき、その食べ
 ものには十分なうま味がないと^い言^うことがあ^った。
 しかしながら、西欧^諸國のほとんどの人々はその
 年である2000年までその味を十分には理解してい
 なかつた。その年に、あるアメリカの大学の科学
 者の一団はうま味の味を感じるものが舌にあるこ
 とを発見した。そのような味のための英語の言葉

はなかっただので、それを英語の言葉として使い始めた。

さて、味を感じる仕組みについて話そうか。舌の地図のような絵を今まで見たことがあるだろうか。舌の異なる部分が異なる味を感じることを示している。例えば、甘い味は先端部分にだけ感じられる。さて、多くの人々はそんなりに単純でないことに賛成である。21世紀の研究が示すにはちよつと花のつぼみのように見えるとしても小さな器官によつて味は感じられる。器官には味細胞の一群があり味らいと呼^ち(4)。かわいい名前だと思わないだろうか。5つの異なる基本的な味のそれぞれはそれぞれの味らいにある異なる味細胞に感じられる。舌の上や周辺にはおよそ7000個から9000個の味らいがある。味らいに感じられるのならその味は基本的な味と呼ばれる。辛い味は味らいではなく近くの他の細胞に感じられるので、基本的な味とは呼ばないのだ。味ではあるが、痛みの感情のようなものだ。

科学者はこの世紀で味についてたくさんのおもしろい発見してきたが、異なる味を感じる時今でもまだ全ての味の仕組みを知っているわけではない。しかしながら、それらの仕組みを研究(5)を続け、おいしい食べものを楽しむこともできる。

タカシは高校生だ。学校のサイクリング部の一員だ。シゲルもその部の一員だ。だからときどき一緒にサイクリングしに行く。両者とも先月新しい自転車を買った。タカシの自転車はシゲルのより少し大きく、というのもタカシはシゲルより少し背が高いからだ。

ある水曜の午後、タカシが学校から帰宅したとき、母は友人でニュージーランド出身の女性であるスズキさんと話していた。スズキさんは外国に旅行することが大好きだ。去年はニュージーランドを訪れた。タカシの母も外国を訪ねること(11)興味がある。スズキさんのニュージーランドへの小旅行について英語で話していた。

「やあ！タカシ。今日は学校どうだったの。」タカシの母は言った。「~~スズキさんとメアリー~~」スズキさんは知っているわね。こっちは彼女の友達メアリーで、ニュージーランド出身よ。」タカシの母は続けた。「こんにちわ、スズキさん、メアリー。」タカシは言った。「メアリーは息子のジョンとスズキさん宅を訪ねているの。タカシ、今週末予定あるの。」タカシの母は尋ねた。「いや、そう考えてないけど、なんで。」タカシは尋ねた。「スズキさんとメアリーは今週の土曜日に出かけないといけなからジョンの世話をしてほしいの。」タカシの母は言った。「ジョンは中学生よ。今回は日本初訪問なの。」メアリーは言った。「今週末過ごす最もよい方法は何か。考えはない。」タカシの母は尋ねた。「サイクリングしに行くのはどう。町を見るいい方法だよ。」タカシ

は答えた。「それはいい考えね。」スズキさんとメアリーは言った。「ジョンはあなたのお父さんの自転車を使えるわ。ちょうどあなたのお父さんのように大きくて背が高いもの。彼の自転車はあなたのより大きいけど、ちょうどジョンにはぴったりのサイズよ。」タカシの母は言った。

すばらしい土曜の朝だった。タカシはシゲルも英語を話せるので来てもらうよう頼んだ。スズキさんとメアリーがジョンとタカシの家に来た。彼は3人の少年(3)。「人にちは、僕の名前はタカシです。初めまして、ジョン。こちらは僕の友達、シゲルです。」タカシは言った。「こちらこそ、初めまして。ヨロシクオネガイシマス！」ジョンは言った。タカシとシゲルは彼の日本語を聞いて驚いた。「上手な日本語を話しますね。」シゲルは言った。ジョンの日本語はタカシとシゲルをとても幸せにした。

さてサイクリング旅行が始まった。タカシがまず行き、それからジョンとシゲルが行った。というのもタカシはシゲルより(4)町周辺の道を知っているからだ。タカシはこの町で生まれ育った。シゲルが中学生のときシゲルの家族は他の都市からこの町へ来た。彼らはサイクリングを通じて友達になった。サイクリングにはすてきでか、こよく完璧な天気だった。学校を通り過ぎ公園を通って行った。公園には走っている人もいた。サッカーをしている子供もいた。木では鳥が歌っていた。空には雲がなかった。ジョンは町の美しい景色を

楽しんでいた。全てが彼とは異な、て見えた。道路沿いに多くの小さな家が見えた。急な坂そのぼりするとき、一息つくの只2,3回止(5)。およそ1時間後町の反対側の砂浜に到着した。急な坂そのぼりおりするのには本当に大変だった。しかし、美しい砂浜が彼らを幸せにした。

3人の少年は砂浜近くの木の下にすわった。青い空と青い海がとても美しく見えたので(6)。ジヨンは昼食を開けておにぎりを食べ始めた。タカシとシゲルは昼食用にサンドウィッチを買った。彼らは笑い始めた。「あなたはやはり日本表の的ですわね、よく米を食べるのですか、ジヨン。」シゲルは尋ねた。「はい、そうです。母は日本食が好きです。私達は私の都市にある日本のレストランへよく行きます。ニュージージーランドでもおにぎりを買えます。」本当ですか。それは知りませんでした。」シゲルは言った。「2つの国に共通にあるものを考えます。日本同様に私の国では車は左側運転です。ですか。しかし、日本を自転車で動き回るのは簡単だと思えます。しかし、私達のルールは(8)かもしません。ニュージーランドの道路では自転車に乗る人は皆ヘルメットを着用しなければなりません。」ジヨンは説明した。「自転車に乗るときヘルメットを着用するよりはより安全だと思えます。」シゲルは賛成です。」タカシは加えた。昼食後、再びサイクリングを始めた。道に沿ってサイクリングした後およそ30分、タカシは寺のとなりの店の壁に描(9)ティーカップの絵を見た。

ま、茶、つまり日本の緑茶の一種を思い出した。
 去年の夏にタカシと父が自転車でカマクラ^邊を
 行っていたとき、寺で外国人を見た。そこでま、
 茶を楽しんでいた。だから、タカシは思、た。「ジ
 ョンも寺でま、茶を楽しんでるう。」(10)。タカシ
 はジヨンとシゲルに言った。「つかわてるの。」シゲ
 ルは尋ねた。「いや、ただジヨンに寺で日本の緑茶
 を楽しんでもらいたいんだ。」タカシはシゲルに言
 った。「オー、それはいいね。」シゲルは答えた。
 「これはとてもおいしい。今まで日本の寺でこの
 種の日本の緑茶を飲んだことはありませんでした。
 サイクリングの長い1日の後にこれはただただす
 ばらしいです。ニュージーランドに戻ったとき、
 これはすばらしい思い出になるでしょう。」ジヨンは
 言、た、タカシとシゲルはお互いを見て笑、た。